

学会ニュース No.148

2024年10月31日 全日本博物館学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28

國學院大學博物館学研究室内

Tel : 03-5466-0268 E-mail : jimumu@museology.jp

*** 目次 ***

2024年度第51回総会・第50回研究大会報告……………1	“博物館学の展示”の最近の事例から—高評価もあり、
全日本博物館学会名誉会長の推挙について……………9	危機感もあり—……………10
2024年度全日本博物館学会賞・奨励賞・特別賞授与	内規等の一部改正について……………14
式について……………9	委員会議事抄録……………15
	会員情報……………16

2024年度第51回総会・第50回研究大会報告

日 時：2024年6月29日（土）・30日（日）

会 場：北海道開拓の村 ビジターセンター

参加者：

総 会：52名（委任状133名）

研究大会：111名（両日の参加者合計）

- （内訳） 正会員（対面・一般）57名
正会員（対面・学生）10名、
正会員（オンデマンド・一般）37名
正会員（オンデマンド・学生）7名
非会員（対面）6名
非会員（オンデマンド）10名

6月29日（土）

《第51回総会》

13：00～13：50

並木美砂子常任委員の司会進行で進められた。

1. 開会の辞 並木美砂子常任委員
2. 会長挨拶 布谷知夫会長（内川隆志会長代行代読）
3. 共催者ご挨拶 中島宏一北海道開拓の村館長
4. 資格審査・総会成立報告 内川隆志会長代行
出席者52名、委任状133名を合わせて、規約の成立要件を満たしており、総会が成立している旨の報告があった。
5. 議長選出
若月憲夫正会員が推薦、議長に選出された。
6. 2023年度事業報告 半田昌之常任委員

7. 2023年度決算報告 半田昌之常任委員

8. 2023年度監査報告 粕谷 崇監事

総会資料に基づき報告、承認された。

9. 2024年度・2025年度・2026年度選挙管理委員会報告

杉山正司選挙管理委員会委員長（伊東俊祐幹事代読）

総会資料に基づき報告された。

10. 2024年度事業計画案 半田昌之会長

総会・大会の開催、学会誌・ニュース発行、研究会の開催、学会賞・奨励賞の選考・授与等について総会資料に基づき提案、承認された。

11. 2024年度予算案 半田昌之会長

事業計画に基づく予算案が提案、承認された。

12. 全日本博物館学会規約第7条の議事事項

①全日本博物館学会副会長の承認 半田昌之会長
副会長に内川隆志委員が承認された。

②全日本博物館学会監事の選出 半田昌之会長

監事に西村功志正会員・安田幸世正会員の2名が選出された。

13. 全日本博物館学会規約第13条の議事事項

①会費の改正 半田昌之会長

昨今の物価上昇等の事情を鑑み、本会の維持及び機能強化のため2025年度以降の会費を正会員六千円から八千円、賛助会員一口年額二万円から三万円に改正する旨提案、承認された。

14. その他議事

前会長・布谷知夫正会員が全日本博物館学会規約第11条の定めるところによる全日本博物館学会名誉会長に推挙、承認された。

15. 全日本博物館学会賞・奨励賞・特別賞選考報告

山本哲也常任委員

『博物館学雑誌』第48巻2号、第49巻1号の掲載論文および会員による著書を対象に選考を行った結果、学会賞は菅井薫氏の『博物館における福祉の実践をめぐる理論的視座—本質主義と適応主義の対立を越えて—』が受賞した。なお、奨励賞および特別賞は該当者なし。

16. 閉会の辞 並木美砂子常任委員

《第50回研究大会》

6月29日(土) 午前

○研究発表・討論(発表15分・質疑応答5分)

(1) *高田浩二、**茅根 創、***丹羽淑博、****崑倉美帆、*****浅野 亮、*****安田昌則、*****林健太郎(*海と博物館研究所、**東京大学大学院理学系研究科、***国立極地研究所、****笹川平和財団海洋政策研究所、*****気仙沼市教育委員会、*****元大牟田市教育委員会、*****国立科学博物館) 地域の動物飼養や吊いを教材にした生物多様性教育の試み

(2) 金山喜昭(法政大学)

博物館法改正とコレクション管理をめぐる諸問題

(3) 寺農織苑(北海道大学大学院)

解説文を読ませる工夫：展示会図録における新たな博物館体験の在り方

(4) 阿部麟太郎(北海道大学大学院)

「第三世代博物館」とはなんだったのか：学会誌分析における1990年代設立博物館と伊藤寿朗

(5) 森 沙耶(北海道大学大学院)

ハンズ・オン展示における家族間の博物館学習の観察：親から子への支援とプロセスに着目して

(6) 魏 雯君(北海道大学大学院)

博物館における展示利用者への認識の変化及び利用向上のための取り組みについて：都道府県立歴史系博物館の常設展示を対象として

6月29日(土) 午後

(7) 島 絵里子(北海道大学大学院)

日本点字図書館附属池田輝子記念ふれる博物館の歩みをたどる：事例研究

(8) 佐藤優香(東京大学)

学校収蔵資料の活用と継承のための展示づくりワークショップ：「問いをつくる」ことを通して深める鑑賞

(9) 木村 文(帯広畜産大学)

ロックダウン時の小規模博物館における教育普及活動：リトアニア共和国ヴィリニュス市の事例

(10) 瀧端真理子(追手門学院大学)

スコットランド国立博物館及びバーミンガム博物館トラストにおける寄附金募集関係求人情報の分析

(11) 戸田 孝(滋賀県立琵琶湖博物館)

総合博物館とは何か：理工系と自然史系の境界領域について考えるために

(12) 中林寿文(サイバース株式会社)

オープンデータを活用した博物館データベースアプリ「Sugoroku.com」のこころみ

(13) 中村千恵(三重県総合博物館)

県立博物館での企業連携活動：三重県総合博物館10年の歩み

6月30日(日) 午前

(14) 井上 瞳(愛知学院大学)

20世紀初頭のボストン美術館における教育普及：ギルマンと岡倉天心の関わりから

(15) 大高 幸(放送大学)

メディアとしての展示：今夏の『昭和初期の和服柄に宿る戦争』展について

(16) 武井二葉(明石市立文化博物館)

学校教育を支える放送教育と博物館教育：「むかしのくらし展」とNHK for School」

(17) 本間浩一(慶應義塾大学)

民俗資料のメタデータの現状調査：特に、家庭用ミシンを事例として

(18) 宮元正博(池田市立歴史民俗資料館)

民具を利用した子ども向けワークショップの事例

(19) Virtualion株式会社(佐藤 愛)

デジタルアーカイブを活かす、バーチャル空間展示を用いた「メタミュージアム®」の実践

6月30日(日) 午後

(20) 佐藤 琴(山形大学)

ナスカの地上絵を展示してみた：山形大学ナスカ研究所10周年展

(21) 松本朱実(社会構想大学院大学)

持続可能性に向けた博物館の活動と教育(ESD)の評価

(22) 西 源二郎

水族館の展示に関する研究：最近の展示傾向

(23) 大関絢子(神戸大学大学院)

ロンドンの「マイグレーション・ミュージアム」の展示にみえる女性移住者像

(24) 大内須美子(留萌市海のふるさと館)

博物館におけるエンパワーメント評価

(25) 藤本将人(宮崎大学)

歴史系博物館における社会認識形成論と学社連携の方向性

(26) 鈴木悠希子

インターネット上で公開される博物館教育普及コンテンツ (OEMR) の学校現場における利活用を目的とした「おうちミュージアム参加館一覧」のユーザビリティ調査

(27) 笹木一義*、奥山英登*、シンウォンジ*、三木暁了*、佐藤優香** (*国立アイヌ民族博物館、**東京大学) 博物館来館者の、来館者像と展示メッセージ伝達の分析の試行：国立アイヌ民族博物館の来館者アンケートの自由回答分析より

○オンデマンド発表 (後日配信)

(28) 永山可奈子 (京都芸術大学大学院) 公立美術館におけるPFI導入に関する一考察

(29) 田川太一 (長崎国際大学大学院) 医歯薬学系大学附属博物館に関する一考察

(30) 宗像晋路 (早稲田大学大学院) 小学校団体の美術館利用への学校側における消極的要因：元教員の立場から

(31) 田中裕基 (多摩六都科学館) 展示解説としてのSNSの活用について：2022年夏企画展「見てみるかい？おくぶかい！貝の世界」より

(32) 伊豆原月絵、奈良崎裕太、藤崎知輝 (日本大学) 博物館のワークショップ参加者と保護者へのアンケート結果からみた博物館教育の現状

(33) 藤崎知輝、奈良崎裕太、伊豆原月絵 (日本大学) ワークショップにおける映像解析を用いた教育の工夫と参加者の意識調査について

(34) 小館誓治*、八木 剛**、大平和弘*、辰村 絢**、河田麻美**、半田久美子** (*兵庫県立人と自然の博物館／兵庫県立大学、**兵庫県立人と自然の博物館) 自然系博物館における未就学児への環境学習の支援：「ひょうごエコロコプロジェクト」におけるプログラム実施園の保護者に対するアンケート調査結果

○ポスター発表

(A) *内田 登、*竹内健二、*蝦名慶樹、*坂倉瑤子、**大久保尚紀 (*光ミュージアム、**日本大学) NFC (近距離無線通信技術) を用いた低コスト音声ガイドの内製化の勧め

(B) 奥本素子 (北海道大学) 新カリキュラム「総合的探究の時間」を活用した博学連携の取り組み

(C) 五月女賢司 (大阪国際大学) 「機能」から「役割」へと変化する博物館の意義

(D) *佐藤優香、**伊永陽子、**横川公子 (*東京大学、**武庫川女子大学附属総合ミュージアム)

近代学校博物館における「中古装束人形」の収蔵と展示

(E) 朱 麗梅 (北海道大学大学院)

住民参加の自治体史編纂における地域博物館の役割

(F) 宇仁義和 (東京農業大学)

「民俗資料」の区分けと資料名称：生産者数と製造数

に注目して

(G) 江口佳穂 (北海道大学大学院)

コロナ禍のオンライン活動における成果と課題：おうち

ミュージアム参加館を対象として

(H) *卓 彦伶、**宇仁義和 (*北海道大学、**東京農業大学) 台湾の博物館法と専門職員の現状

(I) *長谷川暢子、**横山佐紀 (*国立西洋美術館、**中央大学)

ろう学校を対象とした手話による対話型ギャラリートークの実践と課題

【附・2024年度総会資料 一部抜粋】

2023年度事業報告

1. 2023年度第50回総会の開催

日 時：2023年7月1日 (土)

場 所：國學院大學渋谷キャンパス

参加者：44名 (委任状153通)

内 容：2022年度事業報告／2022年度会計報告／2022年度監査報告／2023年度事業計画案／2023年度予算案

2. 2023年度第49回研究大会の開催

日 時：2023年7月1日(土)～7月2日 (日)

場 所：國學院大學渋谷キャンパス

参加者：7月1日 93名 (対面・1日当たりの人数)

内 容：

▼研究発表・討論

(1) 堀江典子 (佛教大学)

消防施設における博物館的機能の現状と課題：アンケート調査の結果から

(2) 川崎真緒 (明治大学大学院)

日本博物館学における「博物館」概念の理解と構築の分析

(3) 戸田 孝 (滋賀県立琵琶湖博物館)

「科学館」と「自然史館」の共存事例から見えること

(4) 福嶋純之 (富山大学大学院)

城郭関連博物館の分類とその特徴について

(5) 町田小織 (東洋英和女学院大学)

クニを展示する意味：1900年パリ万博におけるボスニア・ヘルツェゴヴィナ館（仮）

(6) 森 沙耶（北海道大学大学院）

博物館教育研究におけるFamily Learningについての整理と考察

(7) 木村 文（目白大学）

リトアニアの科学技術系博物館におけるCOVID-19流行前後のソーシャルメディア投稿内容の分析

(8) 邱 君妮（東京文化財研究所文化遺産国際協力センター）

オランダ「共有の文化遺産」概念における協働的な博物館活動に関する研究：アムステルダム国立美術館を事例として

(9) 佐藤崇範（琉球大学）

自然史標本を収蔵する博物館・研究機関等における「研究資料」の現状と課題：アンケート調査結果をもとに

(10) 佐藤 彩（茅ヶ崎市博物館）

市井学芸員の企画が全国展開されるまで

(11) 佐竹 渉（千葉工業大学、岐阜かかみがはら航空宇宙博物館）

限られたスペースで大型な展示物を主題とした企画展の試み：常設展示空間の企画展化

(12) *小館誓治、**八木 剛、*大平和弘、**辰村 絢、**河田麻美、**半田久美子（*兵庫県立人と自然の博物館／兵庫県立大学、**兵庫県立人と自然の博物館）自然系博物館における未就学児への環境学習の支援：「ひょうごエコロコプロジェクト」におけるプログラム実施後の園児の様子

(13) 島 絵里子（北海道大学大学院）

視覚に障害のある児童生徒を対象にした博物館プログラムにおいて肝要なこととは：文献調査からの考察

(14) *中村久美子、**水谷早彩香、***上枝千明、**大野朋子、****池田 勝（*滋賀県立琵琶湖博物館、**神戸大学大学院、***神戸大学、****あさがら野子どもと自然舎）

未就学児を対象とした博物館での自然体験活動における参加者の変化

(15) 瀧端真理子（追手門学院大学）

求人情報から見る米国ミュージアムの寄附金獲得戦略

(16) 井上 瞳（愛知学院大学）

20世紀初頭のアメリカの美術館における日本美術の位置：ベンジャミン・ギルマン『美術館の目的と方法に関する理念』から

(17) 本間浩一（慶應義塾大学）

中央区まちかど展示館のWebサイトのアクセス解析

(18) 笹木一義、奥山英登、シンウォンジ（国立アイヌ民族博物館）

博物館来館者の、来館前後の意識変容・行動変容分析の試行：国立アイヌ民族博物館の来館者アンケートの回答分析試行より

(19) 飯田（松本）日向子（東京国立博物館）

来館時の行動や感情に基づくミュージアム・リテラシーのタイプの分析

(20) 坂倉真衣（宮崎国際大学）

「出会いを起点とした文脈モデル」による展示物：来館者間相互作用過程の可視化

(21) 繁宮悠介（富山国際大学）

会話分析による水族館での学習内容の推定

(22) 久保 健

ドイツ関連の文化遺産見学会から見る館外活動への課題

(23) 竹下春奈（明治大学大学院）

遺跡の活用事業における博物館利用に関する一考察：関東地方の貝塚遺跡を対象として

(24) 持田 誠（浦幌町立博物館）

「博物館が無い自治体の人々」にも「博物館のための負担」をしてもらうには何が必要か？

(25) 金山喜昭（法政大学）

博物館法改正と学芸員養成の在り方について：全国大学博物館学講座協議会によるアンケート結果の分析より

(26) *井上由佳、**梨本加菜、***横山寿美代、****菅祐子（*明治大学、**鎌倉女子大学、***杉並区立沓掛小学校、****新潟市立上所小学校）

博物館・学芸員の社会的役割の理解を促す授業・教材開発のための小学校教科書調査結果の中間報告

(27) 田中裕二（静岡文化芸術大学）

大学と地域に根ざした美術館・博物館における実践教育と連携について

▼ポスター発表

(1) 寺農織苑（北海道大学大学院）

ファミコンの何を展示すればよいか：ミュージアムにできるゲームアーカイブ

(2) *宇仁義和、**オン・ゼウォン（*東京農業大学、**元大韓民国歴史博物館）

韓国の学芸員制度と博物館：日本との比較から

(3) 並木美砂子、蓮井雅之（帝京科学大学）

市民との共同によるホッキョクグマ行動観察のとりくみ：大阪市天王寺動物園の親子ホッキョクグマの観察事例より

(4) *井上由佳、**横山寿美代、***菅祐子（*明治大学、**杉並区立沓掛小学校、***新潟市立上所小学校）

学校図書館を活用した博物館理解を促す授業実践：杉並区と新潟市の事例から

(5) 嶽本あゆみ (沖縄工業高等専門学校)

ハンズオンを目的とした衝撃成形レプリカ標本における転写性と原型への影響

(6) *鈴木悠希子、**大澤夏美、***山田良輔、****持田 誠、*****卓 彦伶 (*国際基督教大学、**北海道大学文学院、***札幌市博物館活動センター、****浦幌町立博物館、*****北海道大学文学研究院)

博物館のPR手法としての「博物館擬人化」

(7) 馬場幸栄 (国立科学博物館)

ヒ素を含む国内大学図書館収蔵洋書の発見と分析

(8) 阿部麟太郎 (北海道大学文学院)

エコミュージアムと「風土」論

(9) 松山沙樹 (京都国立近代美術館)

美術館における絵画鑑賞の内容・方法・鑑賞教材等のアンケート集計

3. 博物館学雑誌の発行

第49巻第1号の編集と発行

第49巻第2号の編集と発行

4. 学会ニュースの発行

No.145 2023年10月31日発行

No.146 2024年1月31日発行

No.147 2024年4月30日発行

5. 研究会の開催 計2回開催

第1回研究会

テーマ：見学会『触の祭典「ユニバーサル・ミュージアム さわる！めぐる物語」』

研究会「さわる展示」の先にあるもの

主 催：全日本博物館学会

協 力：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

日 時：2023年12月11日(日) 13:30~17:30

会 場：見学会 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA及びまちや倶楽部で開催中の展覧会

『触の祭典「ユニバーサル・ミュージアム さわる！めぐる物語」』

研究会 アンドリュース記念館及びオンライン(ZOOM)によるハイフレックス開催

参加者：見学会10名(対面のみ)・研究会74名(オンライン64名及び対面10名)

第2回研究会

テーマ：研究会「生物標本の収蔵と活用の問題～国内

の先進事例を参考に～」

見学会 高知県立牧野植物園

主 催：全日本博物館学会

共 催：こうちミュージアムネットワーク、高知みらい科学館

後 援：高知県・高知県教育委員会、高知市・高知市教育委員会

日 時：研究会 2024年2月20日(火) 13:00~16:30

見学会 2024年2月21日(水) 10:00~11:30

会 場：研究会 オーテピア4階研修室・集会室

見学会 高知県立牧野植物園

参加者：研究会72名・見学会36名(いずれも対面のみ)

6. 全日本博物館学会創立50周年記念事業の開催

テーマ：創立50周年記念国際シンポジウム「日本の博物館の未来を拓く：国際的潮流から考える」

創立50周年記念ワークショップ「日本の博物館の未来を拓くには」

日 時：2023年9月17日(日) 13:00~18:00

主 催：全日本博物館学会、独立行政法人国立科学博物館、公益財団法人日本博物館協会、ICOM日本委員会
協 力：國學院大學

講 師：スアイ・アクソイ氏 (ICOM〔国際博物館会議〕元会長)

場 所：國學院大學学術メディアセンター及びオンライン(ZOOM)によるハイフレックス開催

参加者：国際シンポジウム110名(オンライン70名及び対面40名)・ワークショップ39名(対面)

7. 委員会等の開催

① 全日本博物館学会委員会 計8回開催

第1回定例委員会：2023年7月2日(日)、対面による開催、各委員会の今年度の活動について等

第1回臨時委員会：2023年9月11日(月)、ZOOMによる開催、創立50周年記念シンポジウムについて

第2回定例委員会：2023年10月17日(火)、ZOOMによる開催、次年度研究大会について等

第3回定例委員会：2023年12月13日(水)、ZOOMによる開催、次年度研究大会について等

第4回定例委員会：2024年2月27日(火)、ZOOMによる開催、次年度研究大会について等

第5回定例委員会：2024年5月9日(木)、ZOOMによる開催、次年度研究大会について/次年度について等

第2回臨時委員会：2024年5月21日(火)、ZOOMに

よる開催、会費改正について等

第6回定例委員会：2024年6月29日（土）、対面による開催、今年度の活動について等

- ② 全日本博物館学会賞・奨励賞・特別賞選考委員会
2024年5月7日(火)に対面開催、以下著作を学会賞と決定し、2024年度総会にて授与
菅井 薫「博物館における福祉的実践をめぐる理論的視座一本質主義と適応主義の対立を越えて―」『博物館学雑誌』第49巻第1号（2023年12月25日発行）
- ③ 博物館学雑誌・学会ニュース編集委員会
メール・ZOOM上での協議
- ④ 全日本博物館学会創立 50 周年記念事業実行委員会
メール・ZOOM上での協議
- ⑤ 全日本博物館学会選挙管理委員会 計 4 回開催
第1回選挙管理委員会：2024年1月23日(火)、対面による開催、選挙日程・名簿・会告の確認、立候補・推薦用紙等の発送
第2回選挙管理委員会：2023年2月16日（金）、対面による開催、立候補者・被推薦者の集計、意思確認書類等の発送
第3回選挙管理委員会：2023年2月28日(水)、対面による開催、候補者名簿の確定、投票用紙の発送 等
第4回選挙管理委員会：2023年3月31日（日）、対面による開催、投票用紙の開票等

8. その他

<事業共催>

なし

<事業後援>

- ・第12回小さいとこサミット in 飛騨
主 催：小規模ミュージアムネットワーク（小さいとこネット）飛騨市、飛騨市教育委員会
開催日：2023年9月3日（日）、4日（月）
会 場：飛騨みやがわ考古民俗館・飛騨市役所
- ・2023年度展示学講座「デジタル時代の展示を考える」
主 催：日本展示学会
開催日：2023年11月24日（金）～11月25日（土）
会 場：東京大学総合研究博物館
- ・第10回水族館シンポジウム「水族館とは？日本の水族館を考える」

主 催：東京大学大気海洋研究所

開催日：2023年12月4日（月）～12月5日（火）

会 場：東京大学大気海洋研究所

・第9回公害資料館連携フォーラムin福島

主 催：公害資料館ネットワーク／第9回公害資料館連携フォーラムin福島実行委員会

開催日：2023年12月16日（土）～12月17日（日）

会 場：福島大学

2024年度事業計画案

1. 総会の開催

第51回総会 2024年6月29日（土）

北海道開拓の村（対面開催）

2. 研究大会の開催

第50回研究大会 2024年6月29日（土）・30日（日）

北海道開拓の村（対面・オンデマンド開催）

3. 博物館学雑誌の発行

第50巻第1号・第50巻第2号の編集と発行

4. 学会ニュースの発行

年4回程度発行

5. 研究会の開催

年4回程度開催

6. 全日本博物館学会賞・奨励賞・特別賞の選考・授与

2024年度 選考委員会 2024年5月開催

第51回総会授与

2025年度 選考委員会 2025年4月開催

第52回総会授与

7. 委員会の開催

定例委員会 年6回開催

臨時委員会 随時開催

8. その他

全日本博物館学会創立50周年記念誌の編集・発行

2023年度決算報告

A.一般会計

【収入の部】

費目	予算額	決算額	差異	摘要
年会費	3,020,000	4,156,000	1,136,000	
入会金		60,000	}	新入会30件(3,000円×20件) + (学生入会金免除10件)
正会員年会費	2,820,000	3,876,000		
賛助会員年会費	200,000	220,000		
雑収入	200,000	177,000	▲ 23,000	会員0冊(1000円×0件) 59冊(3,000円×59件)
雑誌売上 (バックナンバー)				
雑誌売上 (定期購読)	200,000	177,000		
その他				
預金利息	5	544	539	
小計	3,220,005	4,333,544	1,113,539	
前年度繰越金(前年決算額)	566,621	566,621	0	
合計	3,786,626	4,900,165	1,113,539	

(単位:円 ▲=収入不足)

【支出の部】

費目	予算額	決算額	差異	摘要
人件費	540,000	515,000	25,000	
幹事手当	480,000	480,000	0	\40,000×12ヶ月(事務局幹事)
臨時雇人給与	60,000	35,000	25,000	発送アルバイト等
事務費	715,000	673,434	41,566	
交通費	200,000	118,884	81,116	幹事等交通費
消耗品費	60,000	57,754	2,246	文房具、発送ラベル、封筒、封筒印刷費等
備品費	0	0	0	
通信費	450,000	487,941	▲ 37,941	雑誌・ニュース発送、諸通知等
雑費	5,000	8,855	▲ 3,855	振込手数料等
事業費	2,360,000	1,677,599	682,401	
委員会費	100,000	95,030	4,970	ZOOM経費、選挙管理委員会開催経費
大会費	200,000	120,167	79,833	
50周年事業費	100,000	61,563	38,437	50周年記念シンポジウム開催経費
研究会費	200,000	174,084	25,916	研究会開催経費
印刷費	1,700,000	1,173,075	526,925	雑誌(49巻1号・2号)・ニュース(No.144~147)等
HP運営費	60,000	53,680	6,320	HP維持管理経費、事務局メール運営費
表彰費	50,000	30,000	20,000	
慶弔費	20,000	0	20,000	
予備費	101,626	135,237	▲ 33,611	選挙管理委員会諸経費(消耗品費・発送費等)
合計	3,786,626	3,031,270	755,356	

(単位:円 ▲=支出超過)

【次年度繰越】

一般会計	(収入)	(支出)	(残高)
	4,900,165	3,031,270	= 1,868,895

監査の結果、適正に処理されていると認めます。

令和 6年 6月 1日

保管状況(令和5年4月30日現在)

銀行口座(三菱UFJ銀行)	1,928
郵便振替口座	0
郵便貯金口座	1,858,733
現金	8,234
合計	1,868,895

粕谷 崇徳 印

西村 功志 印

2024年度予算

A.一般会計

【収入の部】

費目	2024年度予算額	2023年度予算額	差異	摘要
年会費	3,100,000	3,020,000	80,000	
入会金	2,880,000	2,820,000	60,000	新入会20件(3,000円×20件) 前年度実績より
正会員年会費				470件(6,000円×470件) 前年度実績より
賛助会員年会費	220,000	200,000	20,000	一口20,000円×11件 前年度実績より
雑収入	200,000	200,000	0	
雑誌売上 (バックナンバー)				
雑誌売上 (定期購読)	200,000	200,000	0	バックナンバー販売、定期購読 他
その他				
預金利息	500	5	0	前年度実績より
小計	3,300,500	3,220,005	80,495	
前年度繰越金(前年決算額)	1,868,895	566,621	1,302,274	
合計	5,169,395	3,786,626	1,382,769	

(単位:円 ▲=収入減)

【支出の部】

費目	2024年度予算額	2023年度予算額	差異	摘要
人件費	540,000	540,000	0	
幹事手当	480,000	480,000	0	40,000×12ヶ月
臨時雇人給	60,000	60,000	0	
事務費	715,000	715,000	0	
交通費	200,000	200,000	0	幹事等交通費
消耗品費	60,000	60,000	0	文房具、発送ラベル、封筒、封筒印刷費等
備品費	0	0	0	
通信費	450,000	450,000	0	雑誌・ニュース発送、諸通知等
雑費	5,000	5,000	0	振込手数料等
事業費	2,710,000	2,360,000	350,000	
委員会費	50,000	100,000	▲ 50,000	ZOOM経費
大会費	300,000	200,000	100,000	
50周年事業費	400,000	100,000	300,000	50周年記念誌制作・印刷費
研究会費	200,000	200,000	0	研究会開催経費
印刷費	1,700,000	1,700,000	0	雑誌(50巻1号・2号)・ニュース(No.148～151)等
HP運営費	60,000	60,000	0	HP維持管理費、事務局メールサーバー代 等
表彰費	50,000	50,000	0	
慶弔費	20,000	20,000	0	
予備費	1,134,395	101,626	1,032,769	
合計	5,169,395	3,786,626	1,382,769	

(単位:円 ▲=支出削減)

※なお、2024年度第51回総会資料のうち、「2023年度事業報告」及び「2024年度予算案」の一部に誤りがございましたので、本ニュースを以て訂正すると共にお詫び申し上げます。

全日本博物館学会名誉会長の推挙について

2024年度第51回総会において、2017年度から2023年度まで本学会長の任にありました布谷知夫正会員が、博物館学の振興に加えて本会の発展にご尽力されたことから、全日本博物館学会規約第11条の定めるところによる全日本博物館学会名誉会長に推挙、承認されました。

布谷名誉会長の経歴は、下記の通り。

京都大学大学院農学研究科博士課程中退。大阪市立自然史博物館学芸員、滋賀県立琵琶湖博物館統括学芸員、同事業部長、同上席統括学芸員、三重県総合博物館館長、全日本博物館学会会長、文化庁博物館の運営管理に関する研修企画運営会議委員等を歴任。現在、全日本博物館学会名誉会長、滋賀県立琵琶湖博物館名誉学芸員、三重県総合博物館特別顧問、地方独立行政法人大阪市博物館機構理事等。博士(文学・総合研究大学院大学)、令和4年度文化庁長官表彰。



布谷知夫 名誉会長

2024年度全日本博物館学会賞・奨励賞・特別賞授与式について

2024年度全日本博物館学会賞・奨励賞・特別賞授与式は、2024年6月29日に開催の第51回総会において挙行する予定でしたが、諸般の都合により延期となっておりました。

改めて、2024年8月7日に國學院大學渋谷キャンパスにおいて授与式が挙行され、半田昌之会長より菅井薫正会員へ全日本博物館学会賞及び副賞が授与されました。なお、國學院大學のご厚意により、同大学博物館・考古展示室の一角にある、本会初代会長・名誉会長の任にありました故・樋口清之博士（國學院大學名誉教授・國學院大學考古学資料館名誉館長）の胸像前にて授与式を挙行させていただきました。

※全日本博物館学会奨励賞並びに特別賞は、今年度は該当なしのため授与していません。



授与式の様子

“博物館学の展示”の最近の事例から
—高評価もあり、危機感もあり—

1. はじめに

筆者は博物館の機能を一般に向け発信すべきであると事あるごとに主張してきたし、特に展示機能を活用することの必要性を訴え、そういった展示のことを“博物館学の展示”と称することを提唱している⁽¹⁾。

近年、その“博物館学の展示”の開催事例は数年前までよりも多くなっていると思う。今年、2024年に入ってからこれまでも筆者自身30本以上の“博物館学の展示”に足を運ぶことができたのは、開催事例の多さ故のことと考えている。

中でも、岩国徴古館『岩国徴古館の今までとこれから』(2024/3/10～5/6)、書写の里・美術工芸館『開館30年のあゆみ—館蔵名品展』(2024/4/13～7/1)、福島県立美術館『みんなの福島県立美術館 その歩みとこれから』(2024/8/3～9/16)などは、自館の歴史をただ単に追いかけるのではなく、意欲的な学芸員の姿が想像できるものだった。また長岡市立科学博物館『植物×鳥×ケモノ—なぜ集める？どう守る？—』(2024/5/1～7/7)、なら歴史芸術文化村『文化財修理の現場から』(2024/7/13日～9/16)など、博物館の機能をわかりやすく伝えることに成功していた高評価の展示が多かったのもうれしい事実である。

しかし逆に残念に思ってしまう事例があり、見過ごすわけにいかないものがあった。そこでここにそれらを紹介しつつも意見すべく、一筆したためておきたいと思う。

2. 最近の“博物館学の展示”の好例から

自館の歴史を紐解き、その中で博物館の機能を伝えるのは望ましい姿の一つと考えている。ただ、真面目に年を追ってその活動等をパネルや資料で紹介するだけでは、伝わるものも伝わりづらい。だからこそ、そこに何らかの工夫がなされることに期待するのである。その一工夫が凝らされていたのが、館山市立博物館の『開館40周年記念収蔵資料展「たてはく大図鑑」』(2023/11/18～2024/1/28)だった。

開催当時長岡在住だった筆者にとっては、館山市はかなり遠い存在であった。都内からでも電車で2時間半かかるのだから、長岡から大阪まで行くのとあまり変わらない、そういう距離感なのだ。



写真1 館山市立博物館「たてはく大図鑑」
壁ケースの奥壁にキーワードが並ぶの見える。

しかし、HPで参照したその紹介文に惹かれたのである。館山市立博物館本館は、昭和58年(1983)11月23日に開館してから今年で40周年となります。節目の年に合わせ、博物館の歴史と活動を40のキーワードと関連する資料で紹介します。

この「40のキーワード」に惹かれたというわけだ。40周年にかけて40のキーワードを選ぶと言う。どんなキーワードが並ぶのか、それが気になったし、それを自分の眼で確かめてこそそのものと思え、伺ったのである(写真1)。

そのキーワードをすべて挙げてみよう。

1. たてはく誕生

- ①館山城跡 ②城山公園
- ③館山城(八犬伝博物館) ④博物館本館
- ⑤里見氏 ⑥南総里見八犬伝
- ⑦安房地域 ⑧博物館分館

2. ささえる人々

- ⑨学芸員 ⑩博物館協議会
- ⑪絵図士 ⑫甲冑士
- ⑬指定管理者 ⑭連携
- ⑮入館者

3. 大切な資料

- ⑯資料 ⑰指定文化財
- ⑱文化振興基金 ⑲岩崎巴人
- ⑳収蔵庫 ㉑燻蒸
- ㉒特別利用 ㉓災害

4. 展示ができるまで

- ㉔常設展 ㉕季節展示
- ㉖企画展・特別展 ㉗地区展
- ㉘調査 ㉙借用
- ㉚キャプション ㉛図録
- ㉜ポスター ㉝講演会・解説会

5. たのしく学ぼう

- ㉞古文書講座 ㉟わたしの町の歴史探訪

③⑥ごろべえじいさん ③⑦模型

③⑧館報

③⑨お茶の間博物館

④⑩たてやまフィールドミュージアム

第1章は館の成り立ちであり、常道と言えば常道だが、館山城跡の発掘調査成果を見せたりして、単に博物館建設の話にいきなり持って行かないところもあり、導入としては十分その役を果たしていた。また、県から移譲された県立安房博物館のことなどにももちろん触れられていた。

次の第2章は、ヒトに光を灯すものだった。

「絵図士」「甲冑士」といったミュージアム・サポーターの存在も当然のごとくあって、館山の活動の特徴として理解が進む。「指定管理者」というのは、分館の館山城がそれに当たるからであり、そういう一面にもきちんと触れられていて、運営の内情もわかるという仕掛けとなっていた。

そして第3章でようやくモノに光を灯している。

いろいろ挙げる中で「特別利用」というキーワードなどは意外だった（自分なら思いつくかどうか若干不安に思った一つである）。また、災害にも踏み込んでいるのは最近なら当然と言えるキーワードだったかもしれないけれど、うっかりすると取り上げられないかも…と思ったものだった。

そして第4章は「展示」という目に触れやすい部分をきちんと伝える努力の跡が見られた。

特に特別展の作業工程を図化したものは、博物館の裏側を可視化していて良かった。展示の期間に対しどれだけ手間暇をかけているかが一目瞭然というわけである（写真2）。

そしてさまざまなキャプションのあり方（担当者によっても違う）をそれぞれ見せていた。こういうキャプションは使い終わると意外と簡単に捨てられてしまうと思うが、このような際に使えることに気づかされ、まさに目からウロコだった（写真3）。

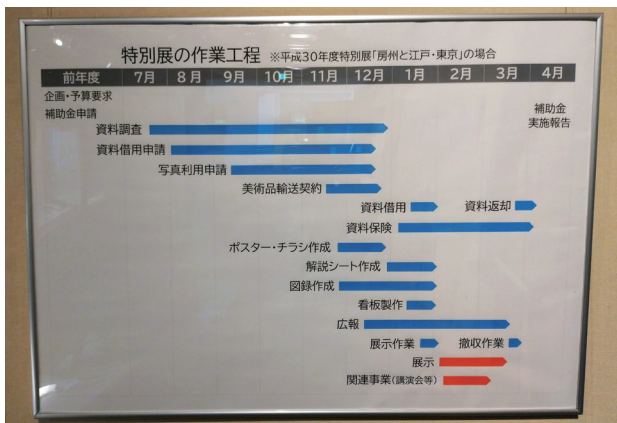


写真2 特別展作業工程の可視化

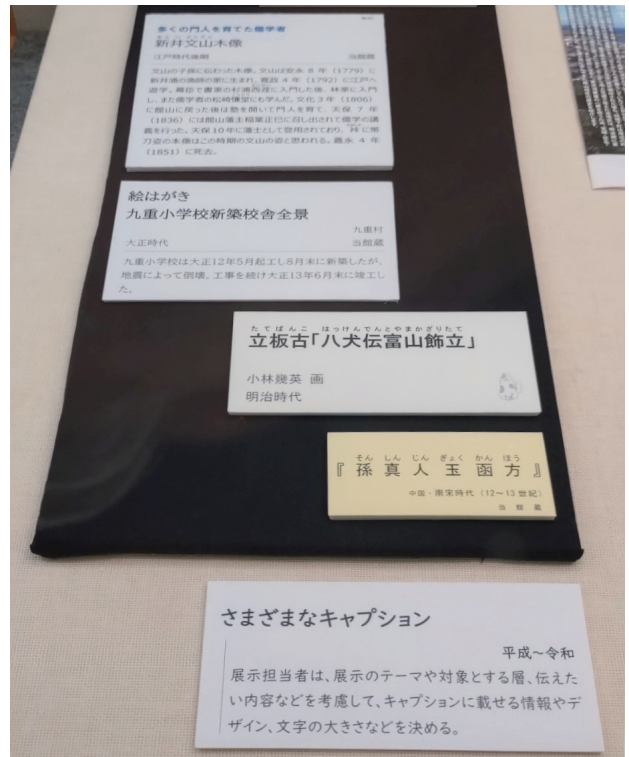


写真3 過去のキャプションの比較

そして第5章は社会教育施設であることを説くという、博物館の意義をさらに明快に伝えるものとなっていた。

このように展示が進むにつれ、どのようなキーワードが出てくるのか、その期待をもって見る事ができた。かなり練られた結果完成したものと十分理解されるものだったのである。

担当学芸員と話してふと思いついて41番目にあなたなら何を持ってきますか？みたいな問いを立ててみるのも面白いのでは？と、そんなことを提案したら、なるほど！と納得された。今後（10年後？）への期待としておきたい。

もちろん、細かいところを言い出すとキリがない。資料がやや弱い（少ない）キーワードの存在などは追及される恐れも感じる。しかし、そういう粗さがしをするのが失礼と思うほど、キーワードの持つ重みを感じつつ見ることができた、そういう展示だったのである。

3. レプリカは「フェイク」か？

和歌山県立紀伊風土記の丘で『和歌山フェイクアワード考古学におけるフェイクの世界一』（2024/7/13～9/8）という展示が開催された。

レプリカなどが展示されるということから、“博物館学の展示”であると見たし、筆者自身レプリカ展を実施した経験から、見逃すわけには行かなかったわけだ。

さて、このタイトルにある「フェイク」を「本物では

ないもの」と定義するとの説明は、わかると言えばわかる。しかし、「フェイク」には偽物、贋物という意味が含まれ、「だます」行為に当たる。その意味もあるところに疑問を感じつつ見ざるを得ないものだった。今やフェイクニュースという言葉の解釈に象徴される、悪い意味での「フェイク」をどうしても考えてしまうのであり、違和感を引きずって見ていくこととなったのだ。

ただし、内容は多岐にわたりさまざまな事象を非常に丁寧に掘り下げたものだった。小さい空間ながら、充実した内容を保持していた。だからこそ、「フェイク」で感情が激しく揺さぶられることとなってしまったというのも残念だった。

古墳時代の石製“模造品”や、学校資料としての模型などにも注目して取り上げているところは感心しつつ拝見できた。

しかしいざ型取り複製の段に至り、やはり複雑な気持ちで見ざるを得なかった。こういうレプリカは何のために作っているのだろう。博物館の展示（教育）などに使用するためであり好意的に使うべき二次資料を「フェイク」と言ってしまうので許されるのだろうか。その疑問が湧き上がる。

もちろん展示では丁寧に「フェイク」を説明しているけれど、しかしやはり「フェイク」にはいい意味で解釈はされないと考えるし、とすると、いざ複製、模造などを丁寧に説明したとしても「フェイク」＝「だます」ことであり、二次資料としての情報伝達やその他の重要な意義ではなく「だます」行為と思われるまいかと、そこが気になるところだった。

つまり「フェイク」という言葉を使って挑戦的な（あるいは挑発的な）姿勢を持っていたのだと思いつつ、それでもモヤモヤが晴れずに見終わることとなったのだ。

展示を見てこそ、使われている「フェイク」という言葉への理解は少なからず得られるかもしれないけれど、見なかったらそれでおしまいだろう。博物館で「フェイク」をやってる。チラシではレプリカがフェイクであると言っている。その一面だけが伝わりはしないか。極めて危険な挑戦だと思うのだ。

いったいタイトルからどう判断されるのだろうか？理解されるのだろうか？そこは慎重に考えるべきところだったと考えざるを得ない。

4. レプリカは「ニセモノ」か？

三重県総合博物館の10周年記念展『標本 あつめる・のこす・しらべる・つたえる』（2024/7/6～9/16）。副題に並ぶ言葉は、収集・保管・調査研究・教育（展示

を含む）という博物館の機能であり、まさに“博物館学の展示”と言える。周年記念でこのような明快に機能を示す展示を持つてくるのをうれしく思いつつ伺った。

実際に拝見し、非常にまじめに丁寧に作られているのはわかった。そして、勉強になる展示であった。しかし、それ以上の感慨が思った以上に出てこなかったのは何故なのか、何度も振り返る自分がいた。

例えば、近隣の施設が閉園（館）などにより寄贈を受けて收藏される例の紹介があった。事実としてそれはわかるが、「博物館行き」という言葉も浮かんできて、ただ「惜しまれながらも閉園」と言うだけでいいのか？という疑問が湧いたのも事実である。

それで、昆虫や鳥類、動物、化石、岩石など、それぞれに標本を取り上げて説明するのはいいとして、各専門の学芸員がそれぞれ担当するのもいいとして、結構頑張って各標本を揃えているように見えながら、どこか遠慮（？）が見え隠れしている気がしたのだ。

せっかくの機会だから、とことん出してやろうという方が、本当に標本を見せているような気がする。その好例が、鳥取県立博物館の50周年記念の企画展『すべてみせます！収蔵庫の資料たち』（2022/10/29～12/11）だった。

鳥取県博の各学芸員の意気込みの凄さに圧倒された。とにかく見てもらおうという気概が感じられ、物量の意味を感じさせ、廃棄してもいいものなどないのだということを見事に訴えていたのが鳥取だった。もちろん、筆者のように両者を比較して評価することはほとんどないだろう。だが鳥取のような姿勢は評価できるし、三重にはもうひと踏ん張りと言いたくなったのだ。

担当が多くなると、議論も場合によっては譲り合いになってしまい、本当の議論にならず平均的または平均より縮小されたものになってしまう恐れがある。三重はそうなってしまっていないだろうか、勝手に想像す



写真4 鳥取県立博物館
『すべてみせます！収蔵庫の資料たち』から
各分野に学芸員の意気込みが表れていた。

してしまった。

つまり、せっかくの機会だから自分のパートは尖がってしまおう（徹底的に出してしまおう）というようなところがあってもいいのではないかと感じたのは確かだった。

誰かが尖がったら、それに追従して尖がった展示のオンパレードになり、それはそれで見る側には疲れてしまう恐れがあるものの、綺麗にまとめた展示よりは記憶に残りやすいのではないかと思うのだ。

つまり、この展示は一つひとつに寄り添うよくできた展示ではあつつ、誰のため？と考えたとき、標本や博物館のことを学ぼうとする者には効果的だが、そうじゃない者にどこまでどれだけ伝わるかということに不安を感じてしまった。

そして、残念だが一つだけ完全に否定しなければならないところがあった。

後半も終わりに近くなり、パネルのタイトルに『魅せるニセモノ「レプリカ」』とあったのだ。そしてその説明には「レプリカや模型は、人が作っただけで「ニセモノ」です」と言ってしまうのである。

なんとも残念な言い方である。

「ニセモノ」と言う言葉の意味は一つではないのはわかる。「似せ（て作っ）たモノ」という緩い意味が無いわけではないだろう。しかし一般的には「人をだますモノ」という意味が強いのではないか。偽札（ニセサツ）は「似せて作ったお札」ではなく悪意あるモノなのだ。

そして、魅せる「ニセモノ」と言ってしまうと、「レプリカはニセモノなんですね（つまり、我々はだまされてるんですね）」と言われても反論すらできなくなるではないか。そう言わせしめてしまう学芸員自身の言い方は、いかがなものか。それに憤慨しないわけにはいかなかった。

憤慨とは言い過ぎだろうか？いや、筆者には憤慨する理由があるのだ。その理由とともに用語使用について警鐘を鳴らしたい。

5. レプリカは「フェイク」「ニセモノ」にあらず

今やレプリカの技術は格段に向上し、過去においては型取り複製や計測模造がせいぜいだったのが、3Dの技術の進化で、非接触の正確な形状製作が達成されつつある（まだまだ甘い成形のものも散見されるのも事実であるが）。

それでも型取り複製の手段がなくなることはないと思うし、その技術の継承も必要と思っている。

その技術をどう評価し、紹介するかなのだ。

筆者自身、これまで多くのレプリカ製作に関わり、実際に資料から型取りし、彩色し、作り上げてきた実績が



写真5 三重県総合博物館の展示から

周年記念の展示で敢えて博物館機能に言及しようとする姿勢は望ましいと考えており、今後各地で開催されることを期待している。

ある。博物館展示に活用されているレプリカも多い。レプリカ製作は、その瞬間に全身全霊を傾けてやってきたとの自負がある。だからこそ成し得る仕事だと思っている。筆者だけではない。レプリカ製作者のすべてがその思いのもと製作に従事していると信じている。だからこそ、その仕事を「フェイク」や「ニセモノ」と言われることが悲しい。

「フェイク」や「ニセモノ」をいとも簡単に使われてしまったということは、製作者への敬意の欠片も感じられないということなのだ。「フェイク」「ニセモノ」を安易に使用してはいないか。その反省が必要ではないか。

5. おわりに

学芸員がレプリカを「フェイク」や「ニセモノ」と言い、そう伝えることは今後一切あってはならない。ここに断言するものである。

せっかくの“博物館学の展示”なのだ。そこは念入りにして欲しい。やはりまだまだ“博物館学の展示”は発展途上だと感じざるを得ない。

開催実績の増加は喜ばしいことである。だが、その中身こそが必要なのは言うまでもない。こういった些細とも言い難いことには警鐘を鳴らしていく必要を感じ、ここに一筆したためた次第。何卒ご理解いただきたい。

註

- (1) 山本哲也 2013「博物館の機能を展示する視点—“博物館学の展示”の提唱」『博物館研究』第48巻第8号、特集「博物館の機能を展示する視点」、6～9頁、日本博物館協会

(山本哲也 國學院大學)

内規等の一部改正について

2024年6月29日開催の第51回総会における、全日本博物館学会規約第13条に規定するところの会費改正承認を受け、8月6日開催の2024年度第2回定例委員会において、下記の通り「全日本博物館学会内規」の一部改正がなされましたので報告申し上げます。

全日本博物館学会内規

新（改正後）

二. 会費

(一) 会費は次の通りとする。

正会員 年額八千円

賛助会員 一口年額三万円、一口以上

入会金 三千円

但し、学生（大学院生を含む）は入会金を免除する。

付則

令和六年八月六日一部改正。施行日は、令和七年五月一日とする。

旧（改正前）

二. 会費

(一) 会費は次の通りとする。

正会員 年額六千円

賛助会員 一口年額二万円、一口以上

入会金 三千円

但し、学生（大学院生を含む）は入会金を免除する。

学会ニュース147号において報告しました「内規等の一部改正について」の一部に誤字がありましたので、お詫び申し上げますと共に下記の通り修正いたします。

全日本博物館学会内規

新（改正後）

四. 機関誌、その他の刊行物

(二) 連絡誌は『学会ニュース』と称し、各年度四回程刊行する。総会・研究会等の学会活動の連絡・報告のほか、会員による投稿原稿等により構成する。投稿原稿の採否は総務委員会がおこなう。

旧（改正前）

四. 機関誌、その他の刊行物

(二) 連絡誌は『学会ニュース』と称し、各年度四回程刊行する。総会・研究会等の学会活動の連絡・報告のほか、会員による投稿原稿等により構成する。投稿現行の採否は総務委員会がおこなう。

委員会議事抄録

【2023年度 第6回・2024年度 第1回委員会】

2024年6月29日：北海道開拓の村

(2023年度)

出席者：内川、金山、五月女、島、高田、高橋、
並木、浜田、半田、山本

委任欠席：伊豆原、井上、可児、栗原、佐々木、布谷
(2024年度)

出席者：内川、粕谷、金山、菅野、五月女、佐藤、島、
下湯、高田、高橋、並木、半田、持田、山本

委任欠席：芦谷、栗原

議事(議長：内川会長代行／半田会長)

(1) 2023年度事業及び会計報告

2023年度事業及び会計について審議、承認された。

(2) 2024年度事業及び予算案

2024年度事業及び予算について審議、承認された。

(3) 第51回総会・第50回研究大会に関する事項

出席者事項、第51回総会次第、全日本博物館学会規約第13条の審議事項(会費改正)、第50回研究大会研究発表の事項について確認した。

(4) 委員会引継ぎ事項

2024年度・2025年度・2026年度会長及び委員の改選に基づき、2023年度委員会から2024年度委員会への引継ぎが行われた。

(5) 全日本博物館学会規約第2条の審議事項

本会規約第2条の規定により、本会事務局の所在地を引き続き東京都渋谷区東四丁目十番二十八号 國學院大學文学部博物館学研究室に置くことを確認した。

(6) 全日本博物館学会規約第7条の審議事項

本会規約第7条の規定により、副会長に内川委員が指名された。同じく常任委員の互選が実施され、総務常任委員に菅野、行事常任委員に並木、編集常任委員に山本の各委員が選出された。同じく監事に西村功志正会員、安田幸世正会員を推薦することを確認した。

(7) 全日本博物館学会規約第10条の1の審議事項

本会規約第10条の1の規定により専門部会を担当する委員が決定され、各担当は下記の通りとなった。

総務：菅野◎、芦谷、内川、粕谷、高田

行事：並木◎、栗原、島、高橋、持田

編集：山本◎、金山、五月女、佐藤、下湯

(8) 全日本博物館学会規約第11条の審議事項

本会規約第11条の規定により、第51回総会において

前会長・布谷知夫正会員を名誉会長に推挙することを確認した。

(9) 後援依頼について

本会への後援依頼について確認、承認された。

(10) その他

正会員の入退会について報告があった。

【2024年度 第2回委員会】

2024年8月6日：オンライン (Zoom)

出席者：芦谷、内川、粕谷、金山、菅野、栗原、五月女、佐藤、島、下湯、高田、高橋、並木、半田、山本

委任欠席：持田

議事(議長：半田会長)

(1) 第51回総会資料の修正について

第51回総会資料に誤りがあったため、修正について確認、承認された。

(2) 第50回研究大会アンケートの実施について

第50回研究大会のアンケートについてその実施方法について確認した。

(3) 全日本博物館学会内規の一部改正について

全日本博物館学会規約第13条に規定するところの会費改正について、改正案が第51回総会において承認されたため、全日本博物館学会内規第2条の1の改正について承認された。

(4) 『全日本博物館学会創立50周年記念誌』について

構成案について確認、山本編集常任委員を中心に創立50周年記念誌編集委員会を結成、担当を決定する方針を確認した。

(5) 出版社からの依頼について

出版社より依頼のあった出版企画について、今後の方針を審議した。

(6) 全日本博物館学会会長・委員の選挙および監事の選任に関する細則の一部改正に関する選挙管理委員会勧告について

2027年度・2028年度・2029年度選挙の実施を目処に、選挙方法等を含めた今後の方針について引き続き委員会で検討することを確認した。

(7) 『博物館学雑誌』のオンライン学術情報データベースへの掲載依頼について

『博物館学雑誌』のオンライン学術情報データベースへの掲載依頼について検討した。

(8) 奈良県立民俗博物館の動向に対する対応について
委員会において検討することを確認した。

(9) その他

『博物館学雑誌』への広告掲載依頼等について報告があった。

【2024年度 常任委員会】

2024年9月17日：國學院大學

出席者：半田、内川、菅野、並木、山本

議事（議長：半田会長）

(1) 日本民具学会声明文への対応について

日本民具学会より「民具（有形民俗文化財）の廃棄問題に対する声明」について、本会への連名依頼があったため、全委員の意見を集約した上での本会の対応について検討。令和6年7月18日に日本民具学会より発出された声明に対し、本会としてその趣旨に賛同する旨の表明をウェブサイトに掲載する方針を確認した。

会員情報

入会者（正会員10名・2024年9月時点）

石本万象	大瀧拓実	奥本末世
久保田荻須智宏	栗山 究	小出治都子
高柳ふみ	田原よし乃	寺田悠紀
横田由真		

退会者（正会員2名・2024年9月現在）

斎藤吉彦 嶽本あゆみ

会員数（2024年9月現在）

一般会員（学生会員を含む）	471名
賛助会員	11団体

【お詫び】 学会ニュース前号において、2024年5月時点で470名（記載ミスにより、正しくは474名でした）としておりますが、会員名簿の再確認を過去5年に遡って実施したところマイナス11名の誤差が生じておりましたため、正しくは2024年5月時点での会員数は463名でした。ここに訂正し、お詫び申し上げます。

お知らせ 年会費の納入について

2024年度会費をご納入いただけていない方は、①・②いずれかの口座まで6,000円をご入金ください。本学会の円滑な運営に、何卒ご協力を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

①郵便振替 00170-4-26144（加入者名：全日本博物館学会）

②三菱UFJ銀行 池袋支店 普通預金：1304291（口座名義：全日本博物館学会）

お知らせ 学会からの通知方法について

本学会では、通達事項は基本的に郵便物で発送しておりましたが、昨今の物価上昇に伴う経費削減と将来的なデジタルトランスフォーメーションの導入を見据えた事務局の負担緩和のため、刊行物等一部を除いて段階的に電子メールによる連絡に切り替えることといたします。

つきましては、学会にメールアドレスを登録されていない方、転職・異動等に伴いメールアドレスをご変更された会員におかれましては、事務局のメールアドレス（jimu@museology.jp）までご登録のメールアドレスをご連絡いただきますようお願い申し上げます。